

## <研究ノート>

# 国語国字問題・歴史紀行～関東信越編～

大橋 敦夫

### はじめに

わが国における近代以降の国語問題は、また国語国字問題とも称されることがあり、とりわけ漢字をめぐる問題に収斂してきたと言える。

国語問題として論ぜられてきた事柄は、具体的には以下のようなものである(1)。

1. 漢字の数・音訓・字体
2. 当て字・熟字訓
3. 仮名遣い
4. 仮名の種類・数(片仮名・平仮名・変体仮名)
5. 送り仮名
6. 漢数字・アラビア数字
7. 語彙・語法
8. 文体・文法
9. 標準語(共通語)・方言
10. 外来語・新語・流行語
11. ローマ字(綴り方・分かち書き)
12. 細別符号
13. 配列順(五十音順・イロハ順・ABC順)
14. 句読点・句読法, 縦書き・横書き

これらは、主な点として、I. 文字表記法の改善(正書法の確立)、II. 標準語の確立、III. 国語問題と国語教育に大別することもできるが(2)、広く関心を集めたのは、①漢字廃止論(代案として仮名専用論・ローマ字専用論・新字採用論)、②漢字制限論、③送り仮名、④仮名遣いであり、いずれにせよ漢字をベースにおいた議論であった。

以上のような歴史的背景をふまえ、それぞれの論をなした人物ゆかりの地に立ち、残された資料や関連の事物を見ながら、今後の調査・研究課題をさぐる旅に出ることとしよう。

## 本編 1・《新潟県》

### ● 前島記念館（上越市大字下池部神明替1317-1）

今日、「日本郵便の父」と称えられている前島密（まえじま・ひそか 1835-1919）は、近代の国語国字問題を語る上で、真っ先に取り上げられる人物である。それは、幕末の慶応2（1866）年に、「漢字御廃止之儀」を将軍徳川慶喜に建議し、それが明治以降の国語国字問題に先鞭をつけたとされるからである。

前島密の生家跡に建つ前島記念館には、次のような資料が並ぶ。

- a. 興国文廃漢字議（和本仕立て）
- b. 岩倉右大臣に呈した内申書（原稿用紙）
- c. 国字に就ての卑見（原稿用紙）
- d. 国字国文改良論及始末（原稿用紙）
- e. 国字改良事ノ要略及ヒ年次経過ノ効（1枚）
- f. 廃漢字論の一部（原稿2枚）
- g. ローマ字式新仮名文字（原稿用紙2枚）
- h. まいにちひらがなしんぶんし（1点）

### 【発展】

1. 前島密の生涯における業績は多岐に及ぶ。江戸遷都を献言、鉄道敷設、郵便創業、新聞事業の育成、陸・海運会社の始動、郵便為替・貯金の開始、訓盲院の創設、勸業博覧会の開催、海員の福祉を育成、電信・電話の開始などである。これらの中であって、前島の国語問題に関する意識の根底には、なにがあったと考えられるか。
2. 前島の仮名専用論とその実践をどのように評価すべきか。
3. 「漢字御廃止之儀」は、言文一致運動の幕開きとも評価されている。その意義について考えてみよう。
4. 本編・4《東京都》に登場の通信総合博物館の資料とも突合せを行い、前島の生涯にわたる国語問題に対する思考の広がりを検討しよう。

### 【参考文献】

『新潟文化』第4号 特集前島密の「官と民」一郵政民営化元年（新潟日報社情

報文化センター情報文化部 2007.11)

## 本編2・《長野県》

### ①旧松代藩鐘楼・松代通信資料館（長野市松代町）

嘉永2（1849）年、佐久間象山が藩の御使者屋敷と鐘楼との間に電線を張り、日本で始めて電信実験に成功した。これにちなみ、旧松代藩鐘楼は、「日本電信発祥の遺蹟」として、長野市指定文化財になっている。

また、佐久間象山を顕彰する象山記念館の2階には、松代通信資料館が設置され、明治期から昭和期の電話機等が展示されている。なお、明治以後、松代からは、樋畑雪湖（逓信博物館の創始者）、野中禎次郎（海底電線敷設の功勞者）、小松謙次郎（逓信省通信局長）など、斯界の人物が出ている。

#### 【発展】

1. 下記の文献を参考にして、電信・電話の実用化に果たした日本人・日本語の役割をまとめてみよう。《キーワード》ジョン万次郎・伊沢修二

#### [参考文献]

三好 彰「電話で話した最初の日本人」『東日本英学史研究』第10号（日本英学史学会・東日本支部 2011.3）

### ②松本市時計博物館（松本市中央1-21-15）

旧開智学校（松本市開智2-4-12）

旧制高等学校記念館（松本市県3-1-1）

個人のコレクションを母体とした和洋の古時計が陳列されている松本市時計博物館。時計の文字盤には、ローマ数字が用いられることが多いが、それは、いつごろから常態化したのだろうか。

明治初期の擬洋風校舎を移築保存し、教育資料を展示する旧開智学校（重要文化財）では、当然ながら、教科書類も多く所蔵し、国語教科書を中心に国語国字問題を考える資料の宝庫と言える。

旧制松本高等学校本館・講堂（ともに重要文化財）に隣接する旧制高等学校記念館にも、全国の旧制高等学校から寄せられた資料が多数収蔵されている。外国語学習を

主とした当時の高校生の日本語に寄せる思いをふり返ってみたい。

【発展】

1. 『西洋時辰儀定刻活測』（小川友忠 安政4年刊）『西洋時計便覧』（柳川春三 明治5年）などを参考にしながら、時計の文字盤とローマ数字の関係について調べよう。
2. 『羅馬数字綴法』（飯田正宣稿訳 明治9年／旧開智学校蔵）を出発点に、明治初期のローマ字教育について調べてみよう。
3. 旧制高等学校で展開されたローマ字運動について調べてみよう。

③タカクラ・テルの碑（上田市別所温泉）

大正10(1921)年から昭和6(1930)年まで、農閑期に毎月開かれた「上田自由大学」。これは、住民主体の教育運動であるが、その講師の一人にタカクラ・テル(1891-1984)がいた。戦前・戦後に住居を置いた縁で、別所温泉にその碑が建っている。

小説・劇作・評論などの文筆活動の中で、国語国字問題にも深い関心を寄せた彼は、国語協会・ローマ字協会の会員でもあった。その思索の結実として『ニッポン語』(1943)がある。

【発展】

1. タカクラの『ニッポン語』(1943)により、彼の考える「ニッポン語の常識」について、整理・検討してみよう。

④西尾 実記念館（下伊那郡阿南町西条2334-1）

国文学者・国語教育学者にして、国立国語研究所初代所長・日本国語教育学会初代会長をつとめた西尾実(1889-1979)。その不滅の業績を後世に伝えるために、同館では、著書・蔵書・遺品などが展示されている。

【発展】

1. 上記役職就任以前にも、西尾は、国民の国語運動聯盟、国語審議会などに関与している。彼の著作(\*)とともに、その国語国字観を検討してみよう。
- \*『国語国文の教育』(古今書院1929) 『言葉とその文化』(岩波書店1947)

『日本人のこぼ』(岩波書店1957) 『言語生活の探求』(岩波書店1961)

『こぼの教育と文学の教育』(筑摩書房1966) 『人間とこぼと文学と』(岩波書店1969) 『こぼの文化をさぐる』(国土社1972)

### 本編・3 《埼玉県》

#### ・羽生市内散策

幕末から明治にかけて、出版・貿易商として活躍した清水卯三郎(1829-1910)は、明六社の同人でもあった。仮名文字普及を提唱し、「平仮名ノ説」『明六雑誌』第7号(1874.3)がある。

パリ万博(1867)での日本美術品の紹介、洋書や歯科医療器具の販売など、多岐にわたる活躍は「隠れたる明治文化の貢献者」と称する向きもある。

彼の足跡を、生家跡地碑(中央4-2-28)、墓石(正光寺 北2丁目)にたどることができる。

#### 【発展】

1. 清水の著作『ゑんぎりしこぼ』(1860)『ものわりのはしご』(1874)によって、その平仮名表記の実践例を確認しよう。
2. 明治期啓蒙思想と国字問題の関連について考察しよう。

#### 【参考文献】

長井五郎『焔の人 しみづうさぶらうの生涯』(さきたま出版会<浦和市>1984.4)  
渡辺隆夫『郷土・羽生の先覚者 しみづうさぶらう』(御園書房<三郷市>1999.9)

### 本編・4 《東京都》

#### ①文京区本郷界限散策

石川啄木の足跡が多く残る地域。金田一京助の世話になった時代で、金田一のいた赤心館跡・蓋平館別荘跡、啄木が間借りした喜之床跡などをめぐりたい。啄木は、この時期に『ローマ字日記』を書いた。

#### 【発展】

1. 『ローマ字日記』に関する先行研究を検討し、文学史上での評価と語学資料と

しての評価の両面をふまえ、総合的に知見をまとめてみよう。

2. 『ローマ字日記』の前後で、啄木の創作活動（テーマ、文章表現）に何らかの変化が見られるか。啄木にとって、ローマ字で書くことの意義は、奈辺にあったと考えられるか。

【参考文献】

菊地 悟「石川啄木「ローマ字日記」のローマ字表記」『日本語の研究』2-2（2006.4）

②山本有三記念館（三鷹市下連雀2-12-27）

劇作家・小説家として著名な山本有三は、戦後、憲法の口語化・国語の新表記の推進・国語研究所の創設などに尽力し、貴族院議員・参議院議員としても活躍した。

三鷹の旧居を東京都に寄付し、それが本館となっている。

【発展】

1. 山本有三が戦後の国語改革に果たした役割について調べてみよう。
2. 山本の説いた「ふりがな廃止論」について論じてみよう。

③東京ゲーテ記念館（北区西ヶ原2-30-1）

「ゲーテ」とつくものなら、何でも集めるとの執念で、生涯にわたる収集をなした粉川忠氏の資料を母胎に展示が行われている。

【発展】

1. 今日ゲーテと表記されるJohann Wolfgang von Goetheは、日本語翻訳史において、ゴオテなど、さまざまな表記がなされ、「ギョエテとは俺のことかとゲーテ言ひ」（斎藤緑雨）という川柳まで詠まれた。同様の例を『昆虫記』で有名なファーブルで、確認してみよう。
2. 外国文学の翻訳作品名における表記の変遷について調べてみよう。

④通信総合博物館（千代田区大手町2-3-1）

国語国字問題の劈頭に前島密がいるように、この問題と郵便や電信・電話は、関係が深い。その歴史理解が、この問題の考察には欠かせない。

**【発展】**

1. 前島記念館と逓信総合博物館、両館における前島密関連資料の所蔵状況を確認しよう。
2. 電報においては、カタカナが使われてきた。カタカナのみによる表現には、どんな注意点があるか。
3. 電話帳は、初期のころイロハ順で作成されていた。大正14(1925)年、縦書きを横書きに、電話番号を算用数字に、そして五十音順に大改正したが、当初はたいへんな不評であったという。この事情について調べてみよう。

**[参考文献]**

逓信総合博物館監修『日本人とてれふおん』(NTT出版株式会社 1990.9)

松田裕之『明治電信電話ものがたり—情報通信社会の《原風景》—』

(日本経済評論社 2001.4)

⑤お札と切手の博物館 (新宿区市谷本村町9-5)

切手の博物館 (豊島区目白1-4-23)

その国の印刷技術のレベルが如実にあらわれる印刷物であるお札と切手。その歴史をふり返るとともに、外国の例との比較で浮かび上がる問題は興味深いものがある。

**【発展】**

1. お札(日本銀行券)の「円」のローマ字表記は、なぜ「EN」ではなく、「YEN」なのか調べてみよう。
2. 日本の切手とローマ字の関わりについて調べてみよう。
3. 各国の切手の国名表記に注目し、国名のローマ字表記について調べてみよう。

⑥印刷博物館 (文京区水道1-3-3)

紙の博物館 (北区王子1-1-3)

印刷の仕組みを理解すること、文字を書きつけたり、印刷したりする紙そのものに対する理解を深めることは、国語国字問題を考える上での基礎を固めることになる。

**【発展】**

1. 書体の違いを実例とともに確認しよう。

2. 「改定常用漢字表」の前書きを読んで、漢字表記のあり方について定見をまとめよう。

3. 紙の大きさを表すA列・B列の違いは、何に由来するのか調べてみよう。

【参考文献】

小林清臣「紙の寸法規格とその制定の経緯について」『百万塔』61

(紙の博物館1985.4)

『わかりやすい紙の知識』(紙の博物館 2005.3)

⑦東書文庫(北区栄町48-23)

公益財団法人教科書研究センター(江東区千石1-9-28)

東京書籍附設教科書図書館・東書文庫は、藩校・寺子屋時代から現在までの教科書約15万冊を所蔵。その一部は、重要文化財に指定されている。

一方、教科書センターは、昭和24年以降の検定教科書約5万冊を所蔵、指導書や外国の教科書も閲覧可能。

【発展】

1. 近代以降、カタカナ先習であった、文字の導入は、戦後ひらがな先習に改められた。その事情について調べるとともに、その是非について論ぜよ。

本編・5《神奈川県》

①日本新聞博物館(横浜市中区日本大通11)

横浜開港資料館(横浜市中区日本大通3)

幕末から明治初期にかけての激動の時代の息吹を感じられる資料が魅力の両館。

明治3(1870)年、初の日刊紙「横浜毎日新聞」が創刊された。それに先立つ明治2年には、日本アジア協会が横浜居留地で創立され、外国人による日本文化の研究が始まった。

【発展】

1. 明治啓蒙期の新聞の特徴を表記・表現面から観察しよう。

2. 先行研究をふまえ、ヘボン『和英語林集成』の持つ資料的価値を論ぜよ。



## ②東芝科学館（川崎市幸区小向東芝町1）

日本語（漢字・仮名）は、機械に載らない（ディスプレイに表示できない）と諦めていた状況を打ち破ったのが、同社による日本語ワードプロセッサの開発である（1978年）。不可能を可能にした技術開発は、その後どのような進化を遂げているだろうか。

### 【発展】

1. ワープロが、日本語表記・表現史上に与えた影響について論ぜよ。
2. 同一表現を、ワープロ・メール・手紙・電話・口頭でなす場合の表現効果の違いについて考えてみよう。

## 本編・6《千葉県》

### ・国立歴史民俗博物館（佐倉市城内町117）

常設展示のなかで、平安朝における仮名の発達の展示が、わかりやすく解説されている。また、江戸期に、時代の推移とともに、文書が次第に多く残されていく様子をはっきりと示されている。

### 【発展】

1. それぞれの地域に残る寺子屋資料にふれてみよう。そこでは、どんな文字導入教育が行われていたか調べてみよう。
2. それぞれの地域の地方文書を読んでみよう。

### [参考文献]

『筆子塚資料集—千葉県・群馬県・神奈川県—』「非文献資料の基礎的研究（筆子塚）」報告書（国立歴史民俗博物館 2001.3）

## 今後の課題

タイトルで「関東信越編」と称したものの、未踏の県・地域が多々ある。順次、付け加え、さらには訪問地の範囲を広げ、【発展】の課題を挙げるとともに、縦書きと横書きの問題など、根源的・総合的な課題も示したい。

【発展】の課題は、主に学生向けのレポートを想定して挙げてみたが、自らの回答も別稿等で示していきたい。

(注)

- (1)『日本語百科大事典』(金田一春彦・林大・柴田武編集代表 大修館書店1988.5)  
1232頁参照。
- (2)『日本語学辞典』(杉本つとむ・岩淵匡編著 桜楓社1990.10) 67頁参照。

**【参考文献】**

●全般

土屋道雄『國語問題論争史』(玉川大学出版部 2005.1)

土屋秀宇『学校では教えてくれない 日本語の秘密』(芸文社 2005.7)

●前島 密関係

『前島密自叙伝』(前島密伝記刊行会<葉山>1956.3)

薮内吉彦『日本郵便創業史』(雄山閣 1975.1)

小林正義『郵便史話』(ぎょうせい 1981.8)

●東京ゲーテ記念館

紀田順一郎『図書館活用百科』(新潮社 1981.10)

●横浜関係

松本純一『横浜にあったフランスの郵便局—幕末・明治の知られざる一段面—』  
(原書房1994.8)

横浜開港資料館・横浜居留地研究会編

『横浜居留地と異文化交流—19世紀後半の国際都市を読む—』

(山川出版社1996.6)